

可茂農林事務所の普及活動状況（4月）

今月の重点活動

■管内全域 新型コロナウイルス対策の情報提供および資金繰り支援

農林事務所では、3月末から、管内の農業生産者団体および主要農家に、感染予防対策や融資の特例措置など新型コロナウイルス感染症対策関連の情報提供を随時行っています。

3月に打ち出されたセーフティーネット資金について、販売に影響を受けている花き生産者に情報提供し、融資を受ける準備を支援してきた。4月10日には金融公庫担当者とともに、3戸の花き生産者に対し借入申込の支援を行いました。

4月に入り鉢物類の出荷環境は悪化の兆しを見せています。生産者からは、日に日に状況が悪くなるなかで「融資により一安心できる」との声をいただきました。4月下旬以降も資金繰りの相談を受けており、今後とも情報提供とともに関係機関との連携を密にして、経営が継続できるよう支援していきます。



【配布した対策資料】

（地域支援第一係・斎藤政隆、園芸産地支援係・熊澤良介）

新たなブランドづくり

■水稲（可児市） 可児地区で初めての直播栽培開始

4月9～12日、可児地区で初めてとなる可児市帷子地内にて、本格導入された水稲V溝直播栽培の播種作業が行われました。

担い手農家のオペレーター1名+補助員1名で、約29aを31分9秒で播き終え、播種精度も良好の様子でした。

田に直接籾を撒くことにより、育苗作業の省力化や田植え作業の分散化が期待されるこの技術について現地調査を行い、管内担い手への普及について検討を進めていきます。



【播種作業の様子】

（地域支援第二係・加藤昌亮）

■小麦 出穂期は昨年より早め

小麦の定点生育調査ほを、富加町内のほ場に設置し、定期的に生育調査を行っています。記録的な暖冬により、小麦の生育状況は、平年より早く推移しました。

調査ほ場では11月上旬に播種され、4月上旬に出穂を確認しました。穂数は昨年と同程度で、出穂期は昨年より9日早くなりました。

今後も、赤かび病防除など良品質麦生産に向けて支援していきます。



【小麦の生育状況調査】

（地域支援第一係・宮地雄二）

■ 梨 ジョイント栽培の梨が今年から初収穫の見込み

美濃加茂市山之上では、若い果樹経営者が、岐阜県内で唯一の梨のジョイント栽培に取り組んでいます。前園主である祖父から果樹園を引き継ぎ、平成28年にジョイント栽培用の苗づくりを始め、平成30年春に定植し接木を行いました。育苗開始から5年目の今年に初開花を迎え、夏には初収穫ができる見込みです。

4月9日、農業革新支援専門員の生育調査に同行し、主幹1本当り8本程度の結果枝が確保できていることがわかりました。

今年度から新たにスタートした果樹産地計画に、ジョイント栽培の支援も位置付けられており、産地内の他生産者もその生育状況を注目しています。今後も継続的に支援していきます。



【開花をはじめた
ジョイント栽培の梨】

(園芸産地支援係・宮田洋輔)

■ 茶 JGAP認証を目指し、内部監査を実施

白川町の黒川茶生産組合がJGAP認証を取得するため、昨年度から農場と団体のマニュアル作成やルール作り、茶工場の改修等の準備を進めており、農林事務所では、施設改修やルール作りへの助言等の支援を行ってきました。

4月9日、15日、21日には、内部監査員の資格を持ったJAめぐみの職員等により、団体認証に必要となる内部監査が実施されました。農業普及課は、マニュアル等修正が必要な箇所の改善についてアドバイスをを行いました。どれも早期に修正が可能なものであり、一番茶が始まる前には改善する見込みで、審査は6月に予定されています。

今後もJGAPの基準に適合するよう、重点的に支援していきます。

(園芸産地支援係・広瀬貴士)



【内部監査の様子】

多様な担い手づくり

■ 美濃白川就農応援会議 ガイダンスの実施

4月1日、美濃白川就農応援会議が研修生ガイダンスを行い、研修がスタートしました。

今年度は3名の研修生を受け入れることとなり、そのうち1名が就職氷河期世代の新規就農促進事業の対象候補となります。当会議は準備型等研修機関に認定されており、研修生は、あすなろ農業塾長によるOJT研修を中心に、部会や当会議、就農応援会議等の関係機関による講義などを受け、就農に必要な知識や技術を習得します。

今後も研修拠点の活動を積極的に支援していきます。

(地域支援第二係・加藤昌亮、園芸産地支援係・矢嶋雄二)



【研修生ガイダンス】